

友達の母と身体の関係



「それならおばさんと寝ちゃおう？なんちゃって♪
おばさんじゃ嫌よね？あはは・・・あれ？」



「〇〇君セマるでしょ？マテない？あら、周りの子を見る目ないのねえ」

ある日の午前中

「はい俺の勝ちー」

「あの・・・俺このゲーム今日はじめてやるんだけど
ハメとかさすがにズルくない？」

「勝ちやいいんだよ勝ちや」



「あんだそろそろ部活じゃないの？」

「あつ、そうだった

じゃあ片付けよろしくなー」

「おい！・・・行きやがった」



「まったくあの子ったら・・・片付け？」

「ああ、ゲームで負けた方がするって話になって
まあ俺も散らかしたんで良いんですけど」



「もー、あの子がほとんど散らかしたんでしょ？
片づけ手伝うわね」

「どうもっす」

「嫌だったらちゃんと言うのよー言う時に言わないと・・・」

おばさんはいつも優しいなあ

歳は結構いつてるはずなのに全然若く見える

そして何より身体がヤバイ、エロい

「・・・んっ？なにに？」

「いえ、おばさんは変わらないなあと、綺麗で若いっていうか」

「またまた上手なんだからゝ褒めても何も出ないわよ？」

褒めるなら同じくらいの女の子褒めなきゃ」



「○○くんイケメンだからモテるでしょ？」

「いやあ・・・彼女も居ないしモテた事なんて今まで一度もないっすよ」
「あらっ、周りの子たちは見る目ないのねー」



「それなら私と寝ちゃう？」
「なんちゃって、おばさんじゃ嫌よねーあはは」

『。。。』

『はは。。。あれ？』





やってしまった・・・

流されるまま息子の友達に抱かれてしまった



「はぁ・・・はぁ・・・ありがとうございます・・・」

「うん・・・」

・・・ま、まあ一回くらいいいわよね？

「あの・・・俺、おばさんの事が・・・」

うう、何だか余計に大変な事になってきたわ
でも無下にするのはかわいそうだし・・・

ん？

ん

。。。ぐう

「うっ」

「あら、疲れてお腹空いた？」



「・・・うふふ、ご飯作るから食べていきなさい」

「いいんですか？」

「遠慮しないで」

「すみません・・・あの、それで、あの・・・」



「さっき言いかけた事は簡単に口にしたらダメよ
またエッチしたくなったら付き合うから、ね？」

「は、はい、わかりました！」

こうなったのは私の責任だし

気が済むまで付き合っであげなきゃね

台所に入って数分後

落ちついたと思ったんだけど・・・

「あんなに出したのにもう我慢できなくなっちゃったの？」

「すいません・・・」

(年頃の男の子だもんね)
「あんまり激しくしちゃだめよ？」

ターン



私の言いつけを守って
ゆっくりしてくれてるけど・・・これすごい





(。。。あーだめね、私もスイッチ入っちゃった)

「あの、もつと・・・」

「うふっ、もちろんいいわよ」



(改めて見るとスゴいわね
若さなのか臭いもキツいし
あのより大きいかも・・・)

じー...

ㄚ

「・・・俺のなんか変ですかね？」

「あつ、いえ、そんな事ないわ？おほほ」



(ピクピクしてきたわね、そろそろかしら)



(アゴ外れちゃいそう・・・)



「すいませんすぐ出ちやいました・・・」

「気持ち良かったならいいのいいの、気にしないで」



「まだまだ元気ねえ、よしよし」





「ただいまー、つかれたー」

「!？」

「すぐバイト行かなきゃだから飯食うよー」

「う、うん・・・食べていいわよお・・・」

「あれ？靴あるな？あいつどこだろ」

「お、おふるかしらねえ・・・」

ガチャ

「お風呂にはいないみたいだけど？」

♪

ビクッ



(もしこのドアを開けてこの状態見られたら・・・ひっ!?)

「できるだけ静かにするから・・・」

「ちょ、ちよっと、いま動いちゃだめよ!？」

ズグ

ズグ



(うわぁ・・・動いちゃってる・・・
息子が扉の向こうに居るかもしれないのに
見られちゃうかもしれないのに・・・)



タパッ

タパッ

コン
ズン

あ♡
フムッ



「ああ時間ねえ、バイトに行ってくるわ！
あいつにも伝えておいて！」

玄関が閉まる音がした

(いつ、いった・・・)

ドキドキして死んじゃうかと思った・・・)

グ
ビュ

ふーっ♡

ゴッ
ゴッ

ド
ッ



「……もおー！●●くん！」

「こういう事はだめよ！」

「はい……」

「まったくもお！」

「す、すみません……」

3
モー!!

「バレたら続けられないでしょ？」

「はい……え？あつ、はい」



その日から時間が会う時は
隠れておばさんとエッチをした



おばさんは家事があるので
あまり時間がとれないようだったけど
可能な限り会ってエッチをしてくれた







「あらこんな時間、もう行かなきゃいけないわ」
「あっ。。。はい。。。」

「またすぐ会えるわ？そんな顔しないで？」

「はい」

「またね」

「。。。」

そんなもやもやとした日々が続いたある日



数日後

電話があつた、もちろんおばさんからだ

「今日からしばらく一人だから泊まりに来ない？」
もちろん行くと伝えた

いつもはあの家には

知り合いと遊ぶ為に行くが

今日は目的が違う・・・ドキドキしてきた



「いらっしやい、お泊りする道具は持ってきた？」
「は、はい！」

「うふふ、緊張してるの？いつも通りでいいのよ」
「そうは言っても。。。努力します」



「知ってると思うけど
今日からあの子は部活の合宿で居ないし
夫は出張だから
しばらくはこの家で二人きりね」

「じゃあ寝室に行きましようか・・・
あれ？どうしたの？」

『。。。』



「どこでしたいの？困ったわねえ」

「そんな事言っておばさんだって
すぐにでもしたいって顔してますよ」

ぐゅ…

ドキ

ドキ

「それにブラつけてないじゃないですか
していいって事ですよね…?」

「うふふ…実は言うとな」

「こうなるの期待してたの、きて」









（毎日家族が通る玄関で・・・）



その後も寝室まで我慢ができません…







(はぁ・・・はぁ・・・)
私の身体だけじゃなく家中マーキングする気かしら・・・
全然寝室につかないわね・・・)



この後5回ほど廊下でやってから
ようやく寝室にたどり着いた

感情に任せてやるのとは違って
寝室のベッドの上だと
どうしても緊張してしまう

そんな俺の気持ちを
察して・・・

「さっきはしてもらったから今度は私ががんばるわね」

「お、おねがいます・・・」

「私に任せてリラックスして」



(おばさんもすごく興奮してるみたいだ
この部屋がそうさせているのかな?)







(うぐっ・・まだ搾り取られてる・・)
「たくさん出てるわね、嬉しいわ♡」

数時間後







ぽんぽん
ぽんぽん

(つかれたあ・・・
まだまだ元気そうだけど
私の体力がもたないわね)

「そろそろ片付けなきゃね」

はー！

お？

「あ、あの」

ん

「これが最後っすか？」



「おばさんもうくたくたで
まあまだ数日あるし」

「いえ、そうじゃなくて
その・・・」

「？」

「俺やっぱり・・・」
（・・・あー、なるほど）



「んもー

エッチの時は雄々しいのに
そういう所は
カワイイんだから♪」

「うつ・・・

俺は俺なりに
真剣に考えてですね・・・」

「心配しないで
ちゃんと考えてあるから」

「マニマニ
マニマニ」

あれから数週間後、ホテル

ズン

タマッ

タマッ

ズン

おばさんは『習い事』をはじめたと家族には言っている
もちろんそんなものはしておらず……





「すいません俺のわがままで」

「私のわがままでもあるし気にしないで？」

(・・・自分でも

ここまでやるとは思わなかった

私の一言から始まった事だし

最後まで付き合ってあげなきゃ)

「それより前も言ったけど

こんな年寄りのおばさんで本当によかったの？」



ドォン

ヤ~~~~♡

「年寄りだなんてそんな！
綺麗で素敵ですよ、大好きです！」
「も、もお、大人をからかったやだめよ」
「俺は本気です」



「もお・・・
そんなまっすぐ見つめられて言われたら
私だって照れちゃうわ・・・」

「でも・・・ありがとうね」

ドキ



ドキ

おしまい



















































































































